Attasammāpaṇidhi 考

平　岡　　聡

Sn. 第260偈をはじめ，ニカーヤ中に散見し得る語に attasammāpaṇidhi（以下 atta°）がある。海外の学者はこの語に特別な意味を認めないが，わが国の学者はこの語を「自らは正しい誓願をたてること」と理解する傾向にある。すなわち atta° の paṇidhi は「誓願（願い）」と解釈されている。しかしニカーヤ中に見られる paṇidhi という語を注意深く考察すれば，この paṇidhi を「誓願」と理解することに疑問を懐かざるを得ない。そこで本小論では，atta° の paṇidhi なる語が，初期仏教当時に有していた意味を明らかにしてみたい。

この語の語根は，Skt. の pra-ṇi-√dhā であるから，paṇidhi は「置く，向ける」という意味を基本とする語であり，派生的に「誓願（願い）」という意味で用いられることもある。しかし，仏教以外の文献ではこの意味で使用されることはまずなく，仏教独自の用法となっている。そこで次に，atta° の実際の用例を見ることにするが，今はこの atta° の訳語を問題にしているため，敢えてこの語は訳出しない。まず最初の用例は *Sn.* 第260偈の教説（cf. *Kh.* p. 3）である。

適当な所に住み，前世で功徳を積んで，atta°，これが最高の幸福である。

またこれに類する説として「四つの輪」（cattāri cakkāni）」という教説が存在している。たとえば *DN.* 34 *Dasuttara-suttanta* では次のように説かれる。

いかなる四法が有益なるものか。それは四つの輪である。すなわち，適当な所に住み，善士に近親し，atta°，そして前世で功徳を積んでいること，これらの四法が有益なるものである。（*DN.* III, p. 276）

これと同類の教説は *AN.* 4. 4. 31（*AN.* II, p. 32）にも存在する。以上四例がニカーヤにおける atta° の用例であるが，次に後代の資料に基づきつつ，それらの atta° に対する解釈を窺見してみたい。まず最初に南伝の註釈書によると，

attan とは心（citta）と言われる。あるいは〔心に限らず〕個体存在全体〔と言われる〕。sammāpaṇidhi とは，この attan を正しく向けること（paṇidhāna），固定させること（niyuñjana），確立すること（ṭhapana）と言われる。（*Paramattha-jotikā* I, p. 132）

atta° とは，ある人がこの世で，悪戒なる自己を戒に住せしめ，信なき〔自己〕を信具足の状態に住せしめ，慳吝なる〔自己〕を施捨具足の状態に住せしめること。これが atta°

と言われる。(ibid., p. 134)

と説明する。このように，少なくとも南伝の註釈書によれば，この paṇidhi は，この語が本来有している「置くこと，向けること」を意味し，何ら「誓願」を意味しないことが理解される。

続いて北伝の資料に見られる atta° の解釈を検討する。まず上記 *Dasuttara-suttanta* に相当する漢訳『十上經』では，この atta° を「自謹愼」(大 1, p. 53b) と漢訳する。すなわち，定本である高麗本では「自らを正しく向けること」の意味に解釈しているが，宋，元，明の三本には「宿曾發精願」とあり，「誓願」の意味で漢訳されている。またこの経の漢訳異本『十法報經』には「自直願」(大 1, p. 234a) とあり，さらに上記 *AN.* 4. 4. 31 の漢訳にも「知諦願」(大 2, p. 877a) とあるから，いずれも「誓願」の意味で漢訳されている。これらに対し，『法句經』では「勅身從真正」(大 4, p. 575a)，また『法句譬喩經』でも「勅身承貞正」(大 4, p. 609a) とあるので，この二経では atta° を「自らを正しく向けること」と解釈している。このように漢訳経典中には，この paṇidhi を「誓願」と解釈するものと，「向けること」と解釈するものとが混在し，この点からしても atta° の paṇidhi を，直ちに「誓願」と解釈するわけにはいかない。さらに北伝の資料である *DN.* 34 *Dasuttara-suttanta* の梵本 *Daśottara-sūtra* (K. Mittal, Berlin, 1957, S. 61) の用例は，パーリ文で複合語となっていた atta° を "ātmanaś (ca) samyakpraṇidhānam" としているが，これも atta° の訳語を決定するにはいたらない。したがってこれら後代の典籍による限り，初期仏教当時にこの語が有していた真の意味に迫り得ない。そこで最後に，ニカーヤ自身の中で atta° と共通する教説を探り出し，その教説から atta° の意味を確定してみたい。

まずその類似教説として指摘し得るのが，*Dh.* 第 43 偈の用例である。ここでは

> 母や父や，あるいは親族達がしてくれるよりもさらに優れたことを，正しく向けられた心 (sammāpaṇihitaṃ cittaṃ) がしてくれるであろう。

と説かれている。ニカーヤにおいて citta は attan と近い意味で用いられ (cf. *SN.* V, p. 29)，また『倶舎論』で両者は同一視されるようになるから，ここでの citta を attan に置き換えても大過はないと考えられる。さらに過去受動分詞 paṇihita を名詞形 paṇidhi に置き換えると，この用例は atta° と共通する教説になる。これに対応する漢訳は，『出曜經』では「除邪就定」(大 4, p. 759c)，『法集要頌經』では「除邪就正定」(大 4, p. 795b)，『法句經』では「可勉向正」(大 4, p.563a)，『法句譬喩經』も『法句經』と同文 (大 4, p. 584b) であるから，総て「向けること」

の意味でこの paṇihita を解釈している。さらに *It.* によると，

> 意を正しく向け（sammā manaṃ paṇidhāya），言葉を正しく語り，身に正しく行い，人は―中略―死後天界に生まれる。(p. 60)

とある。ここでも citta の同義語である manas (cf. *SN.* II, p. 94) を attan に，また連続体 paṇidhāya を名詞形 paṇidhi に置き換えれば，この用例も atta° と共通する教説となる。さらに *SN.* 1. 8. 5 (*SN.* I, pp. 42–43; cf. J. IV, p. 110) にも，

> 語と意とを正しく向け（vācaṃ manañ ca paṇidhāya sammā），身に悪をなさず―後略―

とあり，*It.* と同様の教説が見い出せる。これに対応する漢訳は，「攝持身口意不造三悪法」(大 2, p. 361b)，「除棄口意悪身不行非善」(大 2, p. 479c) とあり，いずれも心口意の三業にわたって自己を正しく向けることを強調する。またこれと対をなす "micchā manaṃ paṇidhāya" (*It.* p. 59)，"vācaṃ manañ ca paṇidhāya pāpakam" (*Sn.* p. 127; *SN.* I, p. 149) という詩句を含む教説も見い出せるのである。さらに atta° の訳語を決定づける教説として *AN.* 1. 5. 1～2. (*AN.* I, p. 8; cf. *SN.* V, p. 10) の教説をあげ得る。

> 誤って向けられた（micchā paṇihitaṃ）稲の穂先が手で捉まれても手を破ることはないように，誤って向けられた心によって（micchā paṇihitena cittena），無明を破り涅槃を証得することは不可能である。なぜなら，その心には誤った方向性があるからだ（micchā paṇihitattā cittassa）。〔逆に〕正しく向けられた（sammā paṇihitaṃ）稲の穂先が手で捉まれると手を破るように，正しく向けられた心によって（sammā paṇihitena cittena），無明を破り涅槃を証得することは可能である。なぜなら，その心には正しい方向性があるからだ（sammā paṇihitattā cittassa）。―抄訳―

この教説の比喩が示唆しているように，ここでの paṇihita は明らかに「方向性」を意識した語として用いられている。以上の考察から，atta° に類する教説が，ニカーヤにおいていずれも「心を正しく向けること」を意味し，何ら「誓願」を意味するものではないことを理解し得たと思う。よって *Sn.* 等にみられる atta° には，「自らは正しい誓願をおこすこと」ではなく，「自らを正しく方向づけること」という意味を基本にした訳語こそが与えられるべきであろう。

以上のことは南方仏教を奉ずる人々にとっては至極常識的な解釈であろうが，わが国では大乗仏教，特に浄土教の影響で，「praṇidhāna (praṇidhi)＝誓願」という理解が一般化しているため，ニカーヤにみられる atta° の paṇidhi をも安易に「誓願」と解釈しがちである。我々が無意識のうちに「praṇidhāna＝誓願」と解釈している現在，もう一度誓願思想を考え直す必要があろう。（仏教大学大学院）